

あろう。

人々はモダン文化に浮かれているように見えながら、実のところ、心の深いところで、震災の悲惨を忘れることはできなかつたのである。そのことが一見モダンでは

あるものの、脆さと華やかさが共存する震災復興文化の性格を形作っているのではないだろうか。

(執筆著者：北原糸子)

2009年度 第3回公開研究会 よみがえる都市景観－震災復興期の「都市美」運動－

はじめに

本公開研究会は、震災復興期における都市の文化変容をテーマにした前回の公開研究会に続いて、震災復興期の「都市美」運動に焦点をあて、関東大震災後から戦時期に至るまでの景観変容について検討することがテーマである。「都市美」運動は、「帝都復興事業」（1923－1930）に並行して民間の団体によって主導され、新たな都市景観の形成にさまざまな形で関与し、大きな成果をあげたが、わずか10年後、震災によって市街地は再び灰燼に帰してしまう。

この「都市美」運動が震災後の新たな都市景観の形成過程で残した多くの遺産をめぐって、都市計画を専門とし、企画者の一人である川西崇行氏、日本近代文学・モダニズム研究を専門とする鈴木貴宇氏、都市形成史を専門とする佐藤洋一氏の3名が報告を行い、建築史を専門とする津田良樹氏が総合討議のコーディネーターを担当した。



報告1 川西 崇行

帝都復興と『都市美』運動 －震災後の本建築と景観の再整備

都市計画を専門とする川西氏は、震災後の「帝都復興事業」と「都市美」運動について、本公開研究会の総論的な報告を行った。まず、川西氏は「都市美」運動の主な担い手となった「都市美協会」の成立過程を説明した。1923（大正12）年9月の関東大震災後、区画整理や、市街地のインフラ整備を企図した7ヵ年の「帝都復興事業」が進められる中、建築・土木・造園などの領域の人々の他、文学者や美術家なども加わり、多面的に都市の「美」を検討しようとした「都市美研究会」が1925（大正14）年10月に設立され、その二年後の1927（昭和2）年、「都市美協会」に改組された。

「都市美」的な発想の原点は、後藤新平が「帝都復興

事業」にあたって「都市の美観」「情趣ある都市」の必要性を主張し、復興小学校や公園などで実現しようとした動きにすでにみられるという。また、1919（大正8）年に制定された都市計画法にも「都市の美観」の概念が含まれていた。震災復興期にすでにこのような発想があり、その実現を目指した組織や「都市美」という言葉があったことは、ほとんど忘れ去られている。

川西氏は、「都市美協会」の活動で最も顕著な成功例として、「警視庁望楼問題」と「美観地区の制定」を挙げた。前者は、日比谷で罹災し、桜田門に移転した新警視庁の望楼の高さと形状について、新聞などで意見を提示し、皇居の濠の緑地や、当時建設中であった新国会議事堂との景観的調和の必要性を指摘し、望楼の高さを制限することに成功した事例である。この一件を川西氏は、戦後の東京海上ビルをめぐる「美観論争」に先立つこと30年の「快挙」であるとする。

また、後者は、1933（昭和8）年、都市美協会の尽力で、皇居外郭に日本初の「美観地区」が実現した事例である。これに伴い、1934（昭和9）年には美観地区内の建築の高さ制限、翌1939（昭和14）年には美観地区の運用についての「美観審議委員会」が設置され、美観地区も市内の主要な公園や街路に拡張されるなど、まさに日本初の本格的な都市景観の美的な側面からの建築コントロールの仕組みが整備された状況となったが、戦時体制が確立する中で、美観地区の運用は停止され、戦後を待つことになったという。

以上の説明は明快だが、筆者が気になったのは、戦時体制の成立の契機となる国家総動員法の制定が1938（昭和13）年であることを考えると、川西氏が指摘した「美観審議委員会」設置や第一回東京美観審査委員会はいずれも1939（昭和14）年であり、美観地区の運用停止は1943（昭和18）年以降であることをどう考えれば良いのかという点である。ファシズムや全体主義と建築や都市景観の関係に着目する近年の研究動向については言及されず、戦時体制の成立を「美」の否定に直結



させてよいものか疑問が残った。

戦後、建築行政や法体系等が変化し、美観地区は、広告物に関する規定を除いて運用が停止された状態となり、2005（平成17）年の景観法の制定に伴い美観地区が廃止されるまで運用条例を制定できないままであった。川西氏は、現在も美観地区は「景観地区」として指定自体は受け継がれているが運用実態はないことを問題視した。

さらに、1966（昭和41）年の建築基準法改正による絶対高さ制限の解除と「容積制」の導入によって勃発した東京海上ビルの改築に伴う「美観論争」や、近年の丸の内超高層化計画により、戦前の震災復興期に形成された市街地の景観は、その残像すら見えにくくなってきているという。最後に結論として、川西氏は、震災復興期に市街地の「美」のあり方を考えた専門家や市民の存在があったことがほとんど忘れられ、「混沌こそが東京の魅力」「土地の有効利用こそ都市の競争力」「建築の老朽化」云々という言説のみが飛び交う昨今、今一度、80年前の「都市美」運動の思想を紐解くことに意味があるのではないかと報告を締めくくった。



図4 御濠端（1937年）

報告2 鈴木 貴宇

1930年代の銀座における巴里への憧憬 —雑誌『あみ・ど・ぱり』と巴里会

続いて、鈴木氏が、昭和モダニズムの都市文化が最盛期を迎えた1930年代半ばの社会動向を背景に、銀座を往来した巴里会の人々と、彼らの「巴里」への憧憬にこめられた都市のあり方について、現在、ほとんど一般には知られていない巴里会とその機関誌『あみ・ど・ぱり』を取り上げ、「都市美」運動を支えた市民のネット

ワークの活動について報告を行った。文学を素材に人々の心にモダンイメージが共有されていく過程を研究する鈴木氏ならではのアプローチで、川西氏とは違った視点から「都市美」運動の実態を検討する報告として興味深いものであった。

巴里会は、「帝都復興」に東京市民が湧いた1930年代、銀座を拠点に画家、作家、ジャーナリスト、実業家といった人士の集まりである。彼らはパリに滞在経験のある人々が、パリのような都市を銀座に実現させようという問題意識を共有していた。巴里会は、世話役の武藤叟や発起人の黒田鵬心らが中心となり、1930（昭和5）年に発足した、毎月14日（フランス革命記念日）を定例日に会食などをする社交クラブが原点となった。同会は、4年後に機関誌『あみ・ど・ぱり』を刊行している。



図5 雑誌『あみ・ど・ぱり』表紙

鈴木氏によれば、巴里会にとっての銀座とは、「ここ（日本）ではないどこか」という虚構性を持っており、その虚構性を維持するための閉鎖的空間として銀座が舞台となったという。その背景には、帝都復興後の東京は、1940（昭和15）年に開催予定のオリンピックなど、外交的側面から都市景観整備の問題が浮上していたことがあると指摘した。鈴木氏は、巴里会が活動していた当時の雰囲気伝える資料として、「東京ラブソディー」（1936・昭和11年）を、実際に会場で再生して紹介した。

ともすれば単なる文化的エリートの社交サロンのように見える巴里会をどのように位置づけ、評価すれば良いのだろうか。その疑問に対して、鈴木氏は以下のように指摘した。機関誌『あみ・ど・ぱり』を通読していくと、戦時体制へと傾斜していく日本社会の暗い影を垣間見ることができる。当初は気楽な社交サロンの雰囲気が強かったが、国際社会における日本の位置が緊張状態にあった1935（昭和10）年以降、「日仏親善」と「都市美観問題」という二つの軸を中心とする公的な運動を展開するようになるという。当時、前述のオリンピック東京大

会の開催に伴う都市整備問題が浮上し、計画的な近代都市のモデルケースとして、パリに関する知識が求められつつあった。巴里会の人々はこのような社会状況に即して、誌上で「都市美観問題」を熱心に取り上げ始め、銀座の「みゆき通り美化運動」などの実践的な活動を展開するようになるのである。

最後に鈴木氏は、このような巴里会の実践的な活動は、総動員体制下、西欧の近代都市を超越する「大東亜」の「帝都」建設をもくろむ時代の言説とリンクしてしまう危うさがあったことを指摘した。これは、美観地区の運用が戦時期に停止されるという川西氏の指摘とは異なる事例であり、巴里会および「都市美」運動だけでなく、戦時期を考える上で極めて重要な論点として掘り下げて検討すべき問題だと思われるが、これ以上の説明はなかった。今後の成果に期待したいところである。



報告3 佐藤 洋一

廃墟からの戦後景観 —空襲・接収・復興—

佐藤氏は、震災後に形成された東京の景観は、戦争と戦後の占領期（1945-52年）を経ることで、どう変容し、再び復興を遂げていったのかという問題提起を行い、東京のいくつかの地区や場所を題材に、写真や映像を多数使用して、その経過を概観しつつ戦時期から戦後にかけての景観変容について報告した。

佐藤氏は、景観変容を検討する際のポイントとして、都市に対するカメラのまなざし（カメラアイ）がどのように変容していったのかを確認する必要があることを強調した。リアルタイムでの体験のない人々が、残された記録から追体験しようとする際、記憶のあり方は、記録のタイプに依存することを指摘した。そのような問題意識から、写真や映像を素材として、都市空間の変容、都市に対する眼差しの変容をとらえていくことが自分の課題であると述べた。

佐藤氏は、写真の記録のタイプにはA：絵はがき、B：ストレートフォト、C：オフィシャルフォトの3タイプがあり、Aにはコマーシャルリズムや報道性、Bには個人の関心・表現性、そしてCには記録性や正統性という特徴があるという。本報告で紹介した写真は、震災後のスナップショットが多数残されているアマチュアカメラマンの加藤益五郎氏が撮影した写真（台東区下町風俗資料館蔵）や、写真家の石川光陽氏が撮影した東京大空襲

の写真、U.Sアーカイブスの占領軍が撮影した写真群などである。対象とする主な撮影場所は、①浅草周辺、②銀座、③上野～旧南稲成町界隈の3か所である。佐藤氏は、これらの写真を紹介しつつ、戦前の状況、特に1930年代について概観し、次に戦時期の空襲により廃墟となった東京の状況と、そこに向けられたカメラアイのあり方を考察した。

まず、加藤益五郎氏の撮影写真では、銀座の道幅も道路のパターンも明治以来あまり変わっていないこと、大正末～昭和初期には歩道でぶらぶらして写真を撮っても怪しまれない状況であったこと、そして1920年代後半からのカメラの小型化により、写真が都市空間の隅々に、そして日常に入りこんでいったことなどを指摘した。しかし、戦時期には、カメラは人々の日常から再び離れてしまったという。また、占領軍が撮影した写真からは、占領軍のまなざしのあり方を知ることができるが、日本人が撮影した場合、爆撃で焼け残っているものを見るが、占領軍の場合、焼失しているところに視点があるという。写真からこれだけ多数の情報が読み取れることがわかり、大変興味深く思われた。

佐藤氏は、「路上」の持つ意味として、街路空間は、目に見える形態としての側面と、撮影するための契機など、さまざまな視線という目に見えない側面を内包したものであり、「路上」とは共有された現実であるという。最後にまとめとして、時代によって残されている記録が含む「まなざし」の質が異なり、残されている記録のタイプによって、記憶も規定されており、その限界を知っておく必要があるとし、同時に「あり得たかもしれない記録」を想像してみることで、「あり得た記憶」へのアプローチが可能となるのではないかと指摘した。



図6 1945年 銀座 服部時計点前（U.S.Archives 所蔵）



パネルディスカッション



3名の報告者に、コーディネーターとして津田良樹氏が加わり、パネルディスカッションが行われた。まず津田氏は、「都市美」運動や都市景観を論じるにあたって、1960年代の丸の内地区への高層ビル計画をめぐる「美観論争」をどう評価するかは、「踏み絵」になるような重要なポイントではないかと問題提起を行い、各論者に意見を求めた。

川西氏は、「美観論争」について、皇居前の歴史的景観を考慮すると、高層ビル建築推進には批判的にならざるを得ないと自身の見解を述べ、都市計画は確かにある意味でお上の学問という性格を持つが、単純に公と私に分離できるものではなく、大事なのは都市の調和であり、公・私いずれも暴走はよくない。官＝計画・民＝主体の図式が崩れていることを問題にしなければならないと答えた。

鈴木氏は、三信ビル保存運動に取り組んだ経験を交えて自身の見解を述べた。文学研究者である自分は、かつて存在した無名の人々の記憶を文学作品の言葉からさぐることが、建築はそのような記憶を空間・場所として残すことができるため関心を持つようになった。ただ、都市計画や制度に着目しがちな都市史は、結果的に体制側の視線に偏る傾向がある。文学は、風景は変化してもその場所らしさの記憶を言葉で残すことができる。研究者の仕事は、建築や景観がほぼ失われても、一般の人々が街の記憶を読み取る手がかりを提示することである。街の記憶を人々が好悪を問わず語ることができるようになったとき、「都市美」を論じることが可能となるのではないかと述べた。保存運動の実践に携わった経験をふまえた学問論・「都市美」論として、説得力があった。

佐藤氏は、都市計画や都市制度史ではすくいきれない個々の記憶や、自分が体験していない時代や場所をどうしたら追体験できるかに関心があり、補完してくれる資

料や視点が必要であると考えており、自分の場合、それは写真や絵はがきといった資料であると述べた。これらには個人の想いが込められており、年月が経っても記憶を喚起する力を持っているという。また、オルタナティブな視点として、占領期のアメリカ軍側の視点から見えてくる都市景観が興味深いと述べた。個々の人々の記憶に関心を寄せる点で、鈴木氏と重なる部分が多い主張であるが、失われた記憶を補完してくれる資料として写真やポートレートに着目すること、もう一つの視点としてアメリカ軍側の視点から占領期の日本をみるという方法は、佐藤氏のアプローチが極めて独創的であることを示しており、新鮮に思われた。

最後に津田氏は、結論として各論者に「都市美」運動を全体としてどう評価するかを尋ねた。川西氏は、鈴木氏と佐藤氏が強調した場所のちからの重要性については同感であり、これを失わせるような潮流、すなわち新自由主義的な規制緩和などに批判的であると強調しつつ、都市計画を専門とする自身の立場にジレンマがあると述べた。そして、「都市美」運動は、大正デモクラシーから戦時期までのわずかな期間にあた花のように咲いた遺産であり、現在も再検討する価値があるとした。

鈴木氏は、津田氏がいう上からの「都市美」への疑問について言及し、戦前を考える場合、階級差の問題は決定的で、発言する人は基本的に大卒のインテリで、これをマルキシズム的に大衆からの遊離として単純に批判すべきでないと指摘した。巴里会の人々は大衆からの遊離を強く意識して活動していたという。日本で公共的な都市空間が成立していないのは戦前も現在も同じで、戦前の「都市美」についての言説は現在も有効性を持つと考えていると述べた。佐藤氏は、「美観論争」後、高層化の流れをたどった東京の新しい景観を人々がどう受け止めていったかに関心があるとし、ビルの外階段からみた東京の景観や、首都高が皇室関係の御料地を通過することを可能とした時代背景に着目することなど、「もう一つの視点」から検討することの重要性を強調した。

まとめ

今回の公開研究会では、現在ほぼ忘れ去られてしまった「都市美」運動を再発見しようという問題意識の下、異なる分野の3名の報告者がそれぞれ独自のアプローチを展開した。川西氏の「都市美」運動の再評価と歴史的景観を守るための実践的な問題意識、鈴木氏が注目した巴里会の活動の成果と問題点は現代に通じるものであ

るという指摘、そして佐藤氏が強調した、失われた個々の記憶を補完するために写真などの資料を異なる視点から読み解くことの重要性など、数多くの問題提起がなされ刺激的であった。また、唯一、近代を専門としていない津田氏がコーディネーターを担当したことで、とすれば専門的になりがちな論点を、一般の参加者にわかりやすい形で議論することができたように思われる。

残念だったのは、これまでの公開研究会で話題になった震災後～復興期の時代状況と「都市美」運動との関連があまり議論にならなかったことである。また、戦時期の

「都市美」運動の評価についてそれぞれ異なる評価を行った川西氏と鈴木氏の指摘は、掘り下げて議論していたできなかった。都市景観という、きわめて現代的なテーマには論じるべき問題があまりにも多いため、充実した議論が展開されたことは良かったが、これらの点は今後の課題である。今回の公開研究会は学園祭期間中であったことで、学生以上に多数の一般参加者が会場を賑わせ、企画者の一人として嬉しい限りであった。

(執筆：高野宏康)

2009年度、ふたつの公開研究会を終えて

以上、7月18日、10月31日の2回の公開研究会のテーマは、2008年度に開催した公開研究会「震災復興と文化変容」のテーマを引き継ぐものであった。実はこのテーマはその先の歴史も担っている。2003年度から始められた21世紀COEプログラムにおいて、災害研究グループは関東大震災の被害についての研究領域で地震学の分野の専門家と共同研究を行い、その成果の一部を「関東大震災 地図と写真のデータベース」として公開している。これに続いて2008年度開所した非文字資料研究センターにおいては、関東大震災の復興を課題とすることにしたのである。その結果、復興領域ではもっとも研究が進んでいると思われる都市計画の分野について、外部の専門家を招いて研究を進めた。この分野はわたしたち歴史系の研究者のみでは果たしえない課題であるから、共同研究をすることで、それぞれの研究成果を重ね合わせることを期待できると考えたのである。すなわち、都市計画領域の研究者にはまずは、都市計画によって震災後の都市はどのように変貌したのか、また、都市に住む人々が国家や行政などの上からの計画をどのように自らのものとして取り組んだのか、その実際の経過はどのようなものなのかを明らかにしてもらいたいと考えた。歴史系の研究者としてわたしたちは史料の所在を調査し、新しい史料発掘を努め、それらを公開して、公の議論に付したいと考えたのである。

現在までのところ、2008年度第3回公開研究会「震災復興と文化変容—関東大震災後の横浜・東京—」においては都市計画の横浜と東京における違いなどは明ら

かにした。しかし、歴史系の研究者としてのわたしたちが都市計画という事業に批判的観点を持つには至らなかった。そこで、2009年度第1回公開研究会「震災復興期における都市の文化変容」においては、震災そのものの社会的影響をどう考えるかを近代住宅史と近代美術史の分野の専門家をお招きし、震災の慰霊と展示施設である復興記念館について高野が報告を行った。震災の影響について視点の違いはあるものの、生活文化の著しい変容が明らかにされた。しかしながら、その根底には震災そのものの凄惨な経験を振り払うかのような衝動が消費生活、新生活への欲求を駆り立てるものであったという点も見透かすこともできた。続いて、2009年10月に開催された公開研究会「よみがえる都市景観—震災復興期の「都市美」運動—」では、震災復興期の「都市美」運動に焦点をあて、関東大震災後から戦時期に至るまでの景観変容をテーマとした。

一連の公開研究を終え、都市計画の分野では、これまで私たちは関東大震災後の「帝都復興事業」は成功したものという印象をもってきたが、必ずしもそうではないことや、ファシズムおよび戦時体制と都市景観や建築との関係性についての議論がなされていないことにも気づかされた。また、戦災で再び都市景観が破壊されるまでの歴史へ論議が進められたが、震災の各階層の都市生活者の顔が見える議論には至らなかった。歴史学系のこの分野での研究が今に至るまで不足していることを痛感し、わたしたちに課された課題の大きな山を見た思いであった。

(執筆：北原系子)